

## 趣旨説明：「日常のポエティックス」の背景

山崎 稔恵

(オーガナイザー・服飾美学会・関東学院大学)

今年は藝術学関連学会連合創立から10年を数えます。

第1回のテーマは「藝術の変貌/ 藝術学の展望」でありました。本連合設立の呼びかけ人でいらした佐々木健一先生がオーガナイザーを務められ、そのときの御挨拶が本連合ホームページに掲載されております。先生はこのようにのべられました。

18世紀ヨーロッパで生まれた藝術の概念が変化し、「いま、この枠組みが変化」しつつあると前置きされ、「いわゆる《ポストモダン》、『近代の死』『歴史の終わり』などと同じ文脈で語られる『藝術の終焉』の現実の姿です。『藝術の終焉』とは、文字どおり藝術がなくなる、という意味ではなく、これまで正統とされてきた藝術の有り様が失効する、ということです。その変化は何よりも藝術と非藝術との境界の流動化として現れてきます。その際の『非藝術』としては、藝術とかけ離れたものよりも藝術と近似、近接していて、しかも藝術から差別の対象とされてきた活動が重要です。その代表が大衆的な藝術といわれる民俗藝術です。これらはいずれも、西洋近代的なスタンダードに外れるものとして藝術の周辺に置かれてきましたが、このほかにもさまざまな『外部』を考えることができるでしょう」とのべられました。そしてこのような変化が「藝術とは何か」についての理解を一新する可能性を秘めているとされました。

第2回以降もこうした芸術の枠組みの変化、芸術と非芸術との境界の流動化、芸術の生成の場の変容などを背景に数々の研究が披瀝され討議されてきたように思います。今回、そうした過去の集積のもとに「日常」をテーマに掲げたのは、ひと言でいえば「経験」や「感覚」のレベルに属する問題とどう向き合えるかということでした。

近年、人間の暮らしや都市の危機的状況を背景に、諸芸術において「日常」を照射し、そこに新たな価値の地平を拓こうとする動きが見られます。何気ない日常の、ありふれた風景が作家の感性を透過することによって、美的空間に変容してゆく。人間が暮らすうえで必要不可欠なものをあらためて問い、異化した空間のなかで、その意味をあぶりだしてゆく。季節の移り変わりや時の流れ、人びとが繰り返す仕事や休息といった日々の営みを探り、その細部にドラマを見いだしてゆく。街にあふれるさまざまな音を採取することで都市に継承された文化を探求し、過去、現在そして未来を紡ぎだしてゆく、などなどです。日常が放つ正と負の輝きが生きているということを見つめ直させ、静かな感動を与えています。

つまり、こうした近年の芸術表現そのこと自体が、芸術の研究に省察や新たな認識を示唆しているように思われたからでもあります。

振り返ってみればそもそも、芸術において人間を取り巻く環境や人びとの暮らしが映し出されぬことはなかったと思います。それらが積極的に美的対象となり、主題として提示されたか否か、また時代様式やジャンルに左右され副次的余白的なものであったかどうかというようなことはあるにしても、風景や風俗、時事、それに伴う人びとの行為など、馴染み深いさまざまな「日常」がかつて、不在ということはないでしょう。英語では「ありふれた」「ありきたりの」「ふつうの」という意味をこめて *ordinary life* としてみました。

興味深い問題は、享受し解釈する側が、そこにどのようなまなざしを向けてきたのか、です。それらの描写や表現を生み出した社会や集団にとって、それらがいかなる意味をもち、いかなる役割を担っていたのか、そこに人びとのどんな思いが投影され、そこにどのようなイメージが想起されたのか、人間であるならば誰しも拭えない欲望、喜びや悲しみ、驚きや恐怖、快楽や苦痛、まさに生きた人間の現実について、社会や人間との関係性において、どのような洞察や解明がなされてきたのか、という点です。

一方、生活の現場では、日々の営みや体験そのものが美的行為・実践に関わり、目を見瞠らされるような場面に遭遇することが、しばしばあります。たとえば装い、針仕事、料理、インテリア、ガーデニング、観光など。これらは各人がそれぞれの仕方や流儀、慣習にしたがって営む行為と言えます。それゆえ豊かな感受性が直観することのうちに愉しみを見だし、日々呼吸するように反省を加え、積み重ねられた経験のうちに、その美が深められてゆくものと考えられます。ですが、こうした感情や感覚、経験のレベルに属するものは曰く言い難い魅力を有することが認識されながらも扱いにくく、研究の対象から外されるか、脇に追いやられる傾向にあったのではないかと思うのです。

本シンポジウムでは、芸術の「主題」としての日常、芸術が生まれ培われる「垣塙」ともいえる日常、芸術の美や解釈において言説の深淵にそれとなく影をおとす「感性」や「経験」の機微・肌理など複雑に重層する日常の風景やその眺めを「ポエティックス」という言葉に託し、7つの学会から推薦されたパネリストの方々とともに今後の研究・方向について考えをめぐらしてゆきます。